私の捉えた梅林寺

上杉清喜
（会員・佐伯市西上浦）

本堂の前の固く閉した中門、その門扉に刻まれた美事な彫刻、しばし佇んでその隙間から洩れて来る禅寺の空気を満喫して先輩の後に続く。掃き清められた境内を一巡。老松の根本に僅かに点在する笹の緑が白の砂紋にひときわ鮮やかである。清楚・静寂・枯淡、適切な言葉を知らない。そして玄関・通路・本堂縁板の一際部厚いの

中門の扉

が印象的だ。先年吉野に旅した折、蔵王堂の風雨にさらされたのを想い起こして感慨はまた一入深い。

小高い裏山に歴代藩主（有馬氏）は眠る。その規模の広大さ、一驚三嘆の外はない。二十一万石の格式であろう。境内各所に目にとまる歴史を刻んだ塔・歌碑等の数々、さすが鎮西一の禅林道場の貫録は十分である。浅学の身にはその内容を十分理解できないのがもどかしい。

ともあれ単純細胞には、それより何より本堂を始め各部屋の障子が、何れも丹念に繕われて、折りからの澄みきった中秋の朝日にすかされて、新旧濃淡織りまぜて照り映えて見えるあたり、これぞ禅寺の真骨頂よと自然に織りなす幾何学模様の障子の影に、時を忘れてみとれることしばらくであった。

そしてなおも次々と、おそるおそる障子を開く。薄い黒木綿にたすきがけで跣の若年僧の庭掃の姿を捕えた瞬間、そののぞき見を別の僧に制止され、あわてて障子をしめた次第。俗人の考えでは跣にたすきがけのかいがいしさは敢えて人様にみせたい所であろうに。

繕いの障子と、ちらとかいまみた跣の修業僧。私の捉えた梅林寺である。